
懺悔 ~ Z A N G E ~

伝次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

懺悔〜ZANGE〜

【Nコード】

N6925W

【作者名】

伝次郎

【あらすじ】

信二の誕生日を祝おうとアパートで準備をしていた景子は、信二が借りてきたいかわしいDVDを発見する。些細なことでケンカになり、景子はアパートを飛び出す。すぐに帰ろうと思っていたが、見知らぬ男に拉致され、誘拐されてしまった。

景子の友人、由美に、犯人から電話が入る。景子の男を連れて来い、という内容だった。

景子を探すために奔走する信二と友人たち。犯人は誰なのか、景子は見つかるのか。調べていく内に、予想外の展開が待ち受けてい

た。

その一

(一)

「 違うよ、誤解だよ。見たかったわけじゃないんだ。本当だよ、信じてくれよ……」

「じゃ、何でこんな物がここにあるのよ。あなたが借りてきたんでしょ。見たかったんでしょ。白状しなさいよ！」

景子は立ち上がると、語気を強めて怒鳴りつけた。

「出来心だよ。俺、こんなもの借りるつもりじゃなかったんだ。何か面白い映画でもないかと思って寄ってみたんだけど、つい……」

「だから見たかったんじゃないの。どうせ私じゃ物足りないわよね」「そんなに怒らなくてもいいじゃないか。すぐ返してくるから」

信二は蛇に睨まれたカエルのように、タジタジとしている。

「いいわよ。今から見ればいいじゃないの、それ。私は必要ないみたいね。それを見るんだったら私は邪魔でしょ。帰るわ。じゃあね」

「おい待てよ、景子……」

立ち上がるうとした信二の頭上に、たつぷりと嫌味が含まれた励ましの言葉がかけられた。

「ガンバってね。 フン！」

景子は荒っぽく上着をつかむと、ドスドスと音を立てて部屋のドアまで行った。

勢いよくドアを開け、後ろを振り返る。そして鋭い目でキツと睨みつけると、全身の力を込めて、叩きつけるようにドアを閉めた。一瞬部屋全体が軋むほどの勢いだ。

信二は呆然とドアを見つめていると、アパートの階段を大きな足音が遠ざかっていくのが聞こえていたのだった……。

ここは竹中信二が住んでいるアパートの、二階にある自分の部屋である。

安月給のサラリーマンである信二が、町中の不動産屋を探して回り、ようやく見つけた家賃三万円のアパートだ。

繁華街からはかなり離れているが、会社に近いということで、この町の不動産屋をくまなく探していたのである。

閑静な住宅街の中に、ポツンと建っている古ぼけた木造の二階建てアパート。

最初にそのアパートを見たときは、まるで明治時代に建てられたんじゃないかと思うほど古ぼけていた。一階に三部屋、二階にも三部屋。全部で六世帯分である。

その古さにこの部屋を借りることを一瞬ためらったが、家賃三万円は魅力的だ。今どき、そんなに安いアパートは存在しないだろう。そのアパートには、一階と二階それぞれに一部屋ずつ空き部屋があった。信二は少しでも見晴らしのいい二階の一番奥の部屋を借りることにしたのだ。

廊下を歩くとミシミシと音がする。今にも抜け落ちるのではないかと思うほど。部屋の広さは1DK。トイレとシャワールームが同居するユニットは好きではないが、まあ贅沢も言ってられない。

竹中信二、二十三歳。今日が記念すべき、彼の誕生日である。さつき勢いよく飛び出して行ったのは、安田景子、二十二歳。一週間前に誕生日が過ぎたばかりで、信二より一歳年下。

この二人、約一年ほど前、友人の紹介で知り合い、交際を始めた恋人同士である。

景子は、今年大学を卒業したばかりで、信二が住んでいるアパートの近くの、会社の事務をしているOLだ。

会社には両親と共に住む自宅から通い、なかなか泊まりでは出してもらえなかった。といっても、両親が厳しいわけでもないが、どちらかと言えば箱入り娘的存在だろう。

しかし、今日は信二の大事な誕生日。両親には申し訳ないが、景

子の友人に協力してもらい、何とか口実を作って、一泊二日の予定で信二のアパートに来ていたのである。

景子は今日の記念すべき信二のバースデイを、二人で共に分かち合い、二人で共に喜び合おうと、仕事が先に終わる景子が、信二の部屋でパーティーの準備をしていたのである。

豪華なディナーとシャンパン。それからワインは赤にしようか、白にしようか。テーブルにはキャンドルを灯し、BGMはモーツァルトの弦楽三重奏でも……。と、やりたいところではあるが、そんな予算があるわけでもなく、もちろんクラシックCDがあるわけでもない。

そこで……。

「どんなに素敵なレストランの食事より、私が作った手料理の方が美味しいに決まってるわ。何たって、愛があるんだもん。愛に勝る調味料はないはずよ」

景子は自分にそう言い聞かせながら、早速料理を作り始めたのである。

料理のレパートリーは多い方ではないが、自慢できる料理はいくつかあった。

信二の好みも少しは知っているし、その中で一つか二つ、料理に中に入れておけば、信二は絶対喜んでくれると確信していた。

時計を見ると、もうすぐ午後八時。信二が仕事を終えて、そろそろ帰って来る頃だ。

「早くしなくっちゃ」

景子は上機嫌で手料理を作り続けた。急がなくては信二が帰って来てしまう。その前に、部屋の掃除もしなければならなかったのだ。掃除といっても、片付けようがないくらい物が散乱している。所詮、一人住まいの男の部屋というものは、どこでも散らかっているのかもしれない。

しかし、他人から見ればガラクタの山でも、本人にとっては大事な宝物と思っているものが、部屋中に溢れているものだ。

料理を作り終えた景子は、部屋の中を片付け始めた。テーブルの上をきれいに拭き上げ、周りのガラクタは部屋の隅に押しやった。片付けようのない部屋だが、せめてテーブルの周りとお布団だけは綺麗にしなくっちゃ、と張り切っていたのだ。

この場所は、今日のバスデーパーティーのメイン会場。言い換えれば、高級ホテル（鳳凰の間）にも値する場所なのである。

料理をテーブルの上に並べ、信二が帰って来るのを待つだけとなった。

一息ついた景子はテーブルの横に座り、何気なく部屋の中を見回していた。

その時、テレビの下に置いてある青い袋に目が止まった。レンタルビデオの袋だった。

「何借りてきたんだろう。もしかしたら私が観たいって言ってた映画のビデオかもしれないわ。優しいのね、信ちゃんたら」

景子はその袋を取り上げ、中に入っているDVD二枚を取り出した。そして中から出てきたのが、「それ」だったのである。

普通、男の部屋にはどこにでもあると思われる、エッチ系のも。そのタイトルも、景子は恥ずかしくて口にも出せないほどリアルなものだった。

「何でこんなものはあるの？ そりゃ、男の人はみんな見てるかもしれないけど、今日は私が来るの分かってるはずじゃない。それなのに……」

景子は呆然とそれを見つめていた。

男がこんな物を見るのが理解できないわけではないが、今日は二人だけの世界を思う存分満喫するはずだったのだ。そこに変な邪魔者が入り込んだような、複雑な心境になるのも仕方ない。

軽快な足音がアパートの廊下から聞こえてきた。そして弾むようにドアが開いた。

「ただいまー！ 待たせたな。準備はできてる？」

よりにもよって、タイミング悪く信二が帰って来たのである。

景子は背中を向けていた。

「た、だ、い、ま！　　どうしたの？　座ったまま寝てんのか？
けーこちゃん」

信二が景子の肩に手を乗せようとした瞬間、突然景子が振り向いた。その目が怒っているのが信二にも分かった。

「何だよ、怖い顔して。どうかしたのか」

「何よこれ！　今日は何の日か分かってるの？　私がいるのにどう
いうつもりよ！」

景子の手に、あのDVDが握り締められていた。

「あつ！　いや、それは、つまり、その……」

青くなっている信二の顔に、二枚のディスクが飛んで来たのだった……。

アパートを飛び出した景子は、あてもなく歩き始めた。どこに行こうというのではなく、このままいても大喧嘩にしかないことは、景子にはよく分かっていた。

ただ、自分の気を静めたかったのだ。

その景子の後姿を見ている、一台の黒いワゴン車があった。そして景子が歩き始めると、ゆっくりとその車も動き始めた。

むしろくしゃしている景子は、そんなことには気づかず、ただ歩き続けていたのだった……。

その二

(二)

「もしもし、今晚は、竹中ですが……」

「あら、信ちゃん。久しぶりね、元気にしてるの?」

「どうもご無沙汰して。あの、景子ちゃん、帰ってますか?」

景子が部屋を飛び出してから、一時間近く経とうとしていた。

すぐ気を取り直して帰って来るだろうと思って待っていたが、一向に帰って来る気配がない。

信二は携帯電話に登録してある景子の自宅に電話してみることにしたのだ。

「今日は帰って来てないわよ」

と、景子の母が言った。「何でも友達の由美ちゃんが今日誕生日なんだって。それで泊りがけで、みんなでお祝いするって言ってたわ」

「由美ちゃんちですか」

「そうなのよ。信ちゃん、聞いてなかったの?」

母が心配そうに訊いた。

景子の両親には公認のお付き合いをさせてもらっている信二だが、さすがに一泊二日でデートとは言えない。景子は由美の協力を得て、信二のアパートに泊まる手はずだったのである。

「あつ、思い出しました。確かそう言ってたみたいです。僕忘れてました」

「信ちゃんは行かないの?」

「もう夜遅いですから。それに女の子たちで楽しんでいるところを、邪魔できませんからね。後で電話でもしてみます。じゃあ、また」

信二は、景子の完全犯罪を何とか遂行させようと必死だった。もしかしたら景子がアパートに帰って来てそのまま泊まることになれ

ば、ここで景子のアリバイを崩すわけには行かなかったのである。

信二は電話を切ると、そのままポケットにねじ込んだ。

しばらく考えた信二は、また携帯を取り出すと、アドレスから由美の番号を探し出し、発信のボタンを押した。

数回の呼び出し音が鳴ったあと、元気の良さそうな明るい由美の声が聞こえた。

「もしもし、信二さん？ どうしたの？」

「いつ聞いても元気良さそうだね。何か良いことでもあったのかい」
「そんなことないわよ。私はいつでも、何があっても元気がいいの。明るく楽しく美しく、というのが私のモットーなの」

「美しくねえ……」

「何よ、何か文句があんの？ それよりどうしたの。信二さんの方が元気がないじゃない。何かあったの？」

由美が心配そうに訊いて来た。

「景子の奴、そっちに行つてないかな」

「あれ、今日は二人で一緒にいるんじゃないかなかったの？ 信二さん、今日誕生日なんですよ、おめでとう」

「おめでとうじゃないよ。おめでたくないんだよ、それが」

「どうしたの？」

「実は……」

信二は今日のアパートでの出来事を話し始めた。

景子が怒ってアパートを飛び出したところまで話をしたが、さすがにその原因となったビデオの話はできない。

「それで、ちょっとしたことでケンカになっちゃって、出て行つたつきりどこにいったか分からないんだよ。由美ちゃん、どこか心当たりないかな」

「さあ、私も分かんないわ。何かあったらうちに来ると思うんだけど。ねえ、ちょっとした事って、何があったの？ どうしてケンカになったのよ」

「いや、大したことじゃないんだ。怒るようなことじゃないと思う

「んだけどね」

信二は鼻の頭をかきながら、ボソボソと呟くように言った。

「でも景子が怒るなんて滅多にないことでしょ。あの温厚な景子が怒るなんて、よっぽど腹が立ったはずよ。何があったの？」

由美はその手の話になると、身を乗り出すように訊いてくる。テレビのワイドショーはよく見るし、そこらへんのスキャンダルは何でも知っていた。一種の情報塔とも言えるべき存在なのだ。

その時、外は、小粒の雨が降り出していた。

「とにかく、一度アパートに戻ってみるよ。もしかしたら帰って来てるかもしれないし」

「分かったわ。じゃ、どっちにしてもまた連絡してね。心配だから」
「後でまた電話するよ。もし景子がそっちに行ったら、引き止めてくれないかな。じゃ、ごめん」

信二は電話を切ると、真っ暗な空を見上げた。まだ小雨だが、しだいに雨足が強くなりそうな気配を感じ取られた。もう梅雨は明けたはずだが、今ごろの雨は気まぐれである。いつ降り出して、いつ晴れるのか、見当がつかない。信二はこの雨を、女心と同じだ、と思いつながら、小走りでアパートへ向かった。

勢いよくアパートの階段を駆け上がると、自分の部屋まで一直線に走った。廊下の床が、今にも抜け落ちそうな音を立てていた。

もしかしたら帰ってるかも、と思いながらドアを開けてみる。しかし、景子が帰っている様子は見当たらなかった。

「ちくしょう、どこ行っただよ」

信二はその場に座ろうとした。その時、外から大きな雨音が聞こえてきた。

雨が本格的に降り出した音だった。

「もしかしたら、近くで濡れてるかも……」

信二は二本の傘を手に持つと、慌てて外に飛び出して行ったのである。

その三

(三)

通りを走る車の数は少なかった。時折客を乗せたタクシーが走り去っていく程度である。国道から少し入り込んだ住宅街は、仕事先から帰宅する車や、タクシーくらいしか走らない。

今頃は、どここの家庭でも父親が帰宅し、一家団欒の楽しいひと時を過ごしている時間であろう。各家の明かりは灯り、賑やかな笑い声が漏れている家もあった。

「何よ、あんなもん。スケベなんだから」

景子はアパートを飛び出し、ブツブツ呟きながら歩いていた。

アパートを出て左に真っ直ぐ行くと、近くに公園があった。大きな公園ではないが、子供用のブランコと滑り台、そして石で作ったあるベンチが設けてあった。

景子はブランコに腰をかけ、一人で考え事をしていた。

「帰る！」

と信二に言ったものの、本気で帰るつもりはなかった。

「ちよつと言い過ぎたかな。私もバカよね、あんな事くらいで。やっぱりアパートに帰ろうかな」

景子はそう考えながら、立ち上がろうとした。

「でも私のこと、探しに来てくれてもいいんじゃない。こんなに近くにいるんだから」

景子はまた、ブランコに座り直した。

そんなことを数回繰り返しているうち、雨がぽつぽつと降り出した。

公園の中には雨宿りする場所はなかった。入り口の前にある商店の軒下まで景子は走ると、しばらくその場で雨をしのいでいた。信二がさっきまで歩いていた道とは逆の方向である。

しだいに雨足は強くなってきた。

景子は信二のアパートに帰ることを決心した。アパートに帰って信二にゴメンナサイと言えば、今日は楽しい夜になることも、景子にはよく分かっていった。この雨でも走って行けば、ずぶ濡れになるような距離ではなかった。

ハンドバッグを頭に載せ、軒下を出ようとした時、突然誰かが景子の腕を？んだ。

「キャッ！」

景子が後ろを振り向くと、そこには二十代半ばくらいの男が、景子の腕を？んで冷ややかに見下ろしていた。

「何するんですか！ 放して下さい！」

景子は真っ青になり、震える声で言った。

「静かにしろ。別に危害を加えるつもりはない。ちよっと一緒に来てくれないか」

男は無理やり景子の腕を引っ張ろうとしていた。

近くに黒いワゴン車が停まっていた。そのワゴン車の中からもう一人男が出て来ると、景子に近づいて来た。

「やめて下さい！ 放してよ！ 誰か……誰か助けて！」

景子は大声で叫んでみたが、その辺りに人影はなかった。

雨が地面に叩きつけるように降っていた。その音で景子の叫び声もかき消されていた。

「何ですか……あなたたち。私をどうしようというのよ」

「心配するな。俺たちは何もしねえよ。ちよっと人から頼まれただけだ」

「誰から！」

「それは今は言えねえな。とにかく黙ってついて来な」

男は冷ややかに言った。

ヤクザや暴走族風には見えなかったが、体格ががっしりとしているスポーツマンタイプの男だった。車から降りて来た男も、冷たい目つきで景子を威嚇していた。

ワゴン車は十メートルほど離れたところに停めてある。エンジンは切ってあった。いつから停めてあったのか、景子には分からなかった。

公園に来たときから停まっていたのか、ワゴン車がそこに停まるのに気づかなかっただけなのか。景子が座っていたブランコからは、あまり離れていなかったのだ。

いつの間にか、二人の男に両脇を抱えられていた。

「ちょっと、やめて下さい。放して……放してよ！」

景子は必死で抵抗した。

「静かにしろ。痛い目にあいてえのか」

最初に声をかけてきた男が、低くドスの聞いた声で言った。

「いいからこのまま車の中に放り込もうぜ」

「その方が手っ取り早い」

景子は足をバタつかせ、懸命に抵抗した。しかし所詮は女の力だ。二人の男になうはずはなかった。

ズルズルと引きずられるように、ワゴン車のドアの前まで連れて来られた。三人ともずぶ濡れだった。男が後部座席のドアを開け、強引に景子の身体を押し込む。

「痛い！ 分かったわよ。分かったから乱暴にしないで。お願いします！」

景子は半ば諦めかけていた。誰も助けに来る様子もない。

車の中を見回すと、運転席にもう一人男がいた。全部で三人である。

運転席の男は、帽子をかぶり黒っぽいサングラスをかけていた。

その男がどういう人物か、景子には？めない。

「おい、連れてきたぜ」

スポーツマンタイプの男が言った。

「ああ……」

運転席の男はその一言だけで、後は何も言わなかった。後ろを振り向こうともしない。

景子は二人の男に挟まれる形で後部座席に座らせられた。
目つきの悪い男がドアを閉める。

「これからどうするんだよ」

景子の右にいる男が訊いたが、運転席の男は何も言わず、エンジンのスイッチを入れた。

「私をどうするの。私をどこに連れて行こうとしてるの」

景子は哀願した。「お願いだから乱暴なことはやめて下さい」

「うるせえ！ お前は静かにしてろ」

目つきの悪い男が、更にその目を鋭くして低く唸った。

その時、ワゴン車が急発進して走り始めたのである。

景子には、何もなす術がなかった……。

叩きつける雨の音を聞いた信二は、アパートを飛び出すと、公園の方へと向かっていった。左手で自分の傘を差し、右手に景子のための傘を持っていた。

公園の方に目を向けた信二は、入り口に前に停まっている黒いワゴン車に気がついた。

そのまま歩き出そうとした時、突然車のエンジンが始動する。そして車のライトが信二の視界を遮った。

急発進した車の中にいた景子の瞳に、ライトに照らされた信二の姿が映し出された。

「信二さん！」

景子は大声で叫んだ。「信二さん、助けて！ ここよ！」

身を乗り出して窓を開けようとしたが、二人に男に身体を押さえつけられ、動くことができない。

「無駄なことはやめな。どうせ聞こえねえよ」

左の目つきの悪い男が、冷たく言い捨てた。

一瞬目が眩み、立ち止まった信二の横を、猛スピードで黒いワゴン車が走り去った。

その速さのせいか、信二の身体に、まるでシャワーのような水しぶきが浴びせられたのだ。

「バカヤロー！」

信二はワゴン車に向かって大声で叫んだ。身体はびしょ濡れである。

しかし信二が叫び終わる頃には、すでにワゴン車は遠くまで走り去っていた。

そしてそのワゴン車に景子が乗っていたことなど、信二には知る由もなかった……。

その四

(四)

繁華街に近い町の一角に、瀟洒な佇まいの五階建てのワンルームマンションが建っている。豪華、とまではいかないが、アパートとマンションの中間ぐらいという程度の造りだ。学生にはちよつと贅沢だが、大金持ちの社長さんが住むようなマンションではない。

独身桃のサラリーマンやOLが、一人で住むのにちょうどいい、近代的なマンションである。

最上階の一番隅の部屋に、田辺由美は住んでいた。

田辺由美、二十二歳。景子とは高校生の時からの友人で、お互い何でも話せる無二の親友だと認め合っていた。高校の時のクラスも三年間一緒だし、大学も同じキャンパスで学んだ。

由美の性格は、明るく活発で、おしゃべりが好きである。いろんな人とすぐ打ち解けるし、話しもよくできる。だからといって、うるさがられることはなかった。

由美の周りにはいつも多くの人が集まり、老若男女を問わず気に入られた。

どこか一部がいいというわけではないが、一種のカリスマ性みたいなものがあるのではないか、とよく人に言われていた。しかしそんなことは自分では分からなかったし、気にもならなかった。

でも、いつも楽しいはずなのに、一人になるとふつと寂しくなることがあった。悩みもあれば、泣きたいことだっていっぱいある。だが決してそれを人前で出すことはなかった。それが由美の魅力でもあった。

情報塔とよく言われるが、多くの人と話をすれば、否応なく何らかの情報が入ってくるものである。自分の方から訊くのではなく、人が自分に話してくるのだから仕方ない。

「私だつて訊きたくて聞いてるんじゃないわよ」

由美はよくそんな風に呟いていた。由美だつて本当はセンチメンタルな女の子なのだ。

今日も仕事が終わわり、会社の同僚に誘われて、喫茶店でのお茶会に参加した。

若いOLばかりのお茶会は、上司には聞くに耐えない話が多い。会社や上司への不満や、セクハラに関する話題が多くを占めている。本来はO.Lたちの仕事の未熟さや、おしゃべりなど、上司からも言いたいことは山ほどあるのだが、逆セクハラだつて無きにしも非ず、というところだろう。

二時間程度のお茶会の後、マンションに帰り着いたとき、タイミングよく信二から電話があったのだった。

信二からの電話の後、由美は知っている限りの友人の家や携帯に電話をかけてみた。しかし、どこにも景子が寄つたという情報は得られなかった。そしてコンビニで買って来たお弁当で食事を済ませた由美は、信二からの二度目の電話を待っていたのである。

シャワーでも浴びようか、と由美が立ち上がりかけたとき、携帯の着信音が鳴った。

相手を確認せずに、由美は電話を取ると、前置きもなしに言った。「信二さん、待ってたのよ。どうだった？」

由美は相手の返事を待ったが、しばらくの沈黙があった。「もしもし……誰？」

「信二さんじゃなくて悪かったな」

野太い男の声がした。「俺だよ、俺。俺の声、忘れちゃったのか？」

「弘……ちゃん？」

由美は不安げに訊いた。

「そうだよ、俺だよ。コーちゃん」

「何だ、びっくりしちゃった。どうしたの、突然電話かけてきたりして」

「何ではないだろ。別に何でもないよちよつと声が聞きたくなっただけさ」

電話の相手は片瀬弘一だった。由美の大学時代の先輩で、二歳年上である。年上の先輩といっても、ほとんど友達状態に近く、何でも話せる仲間、という感じだった。景子のことも少しは知っているが、由美ほど仲良くしていたわけではなかった。

「それより何だよ、いきなり信二さんだなんて。お前、信二さんとよろしくやってんのか」

弘一はぶっきらぼうに言った。

「何言つてんのよ。そんなことあるわけないでしょ。景子の彼なんだから」

「でも、信二さんからの電話、待ってたんだろ」

「うん、それはそうなんだけど……」

「何かあったのか」

弘一は心配そうに訊いて来た。

由美は携帯を片手に冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し、部屋の三分の一を占めるベッド兼ソファーに座り直した。

「それがさ、今日は信二さんの誕生日だけど、アパートでケンカしちゃったらしいのよ。それで景子が飛び出して、どこに行った分らないの。まさか弘ちゃん、知ってるはずないよね」

缶コーヒーで喉を潤した由美は、一気にそう話した。

「俺が知ってるわけないだろ。どこか別の男の所にでも行ったんじやないのか」

「何よその言い方。景子がそんなことするわけないでしょ。あの子はそんな浮気者じゃないし、あの二人は愛し合ってるのよ。私から見ても分かるもん」

「だったら心配することないじゃないか。愛し合ってるんだっただすぐ帰るはずだよ。もう今ごろ帰ってるんじゃないのか」

「まだ分からないよ。だから信二さんからの電話、待ってるのよ」

「だから、まだ連絡ないんだろ。まだ帰ってないんだよね。そ

れよりお前も信二のことが、好きなんじゃないのか」

弘一はわざと話題を変えようとする言い方で話した。

「そうよ、好きよ。初めて会った時から好きだったけど……でも、今は景子の彼だし、横恋慕はダメなの」

と、自分に言い聞かせるように由美は言った。

「かまうこたねえよ。友達より男だよ。本当に好きだったら、横取りしても自分のものになりたいんじゃないのか」

弘一はあっさりとそう言った。

「何てこと言うのよ。ひどい人ね、あなたって。弘ちゃんがいつもそんなこと言うから、私は……」

由美はそこまで言うのと、言葉に詰まった。本当は弘一にもっと言いたいことがあったのだが、言葉に出せなかったのだ。

「分かったよ、冗談だよ。そんなに怒ることないだろ。俺もどこか心当たりを探してみるよ。後でまた連絡するから」

「お願いよ。何か分かったらすぐ電話してね。じゃ、待ってるわよ」

由美は電話を切ると、ため息をついた。そして残っている缶コーヒを一気に飲み干すと、

「何で弘ちゃんたら、分かってくれないんだろう……」

と、一人呟いていた。

由美が時計を見ると、午後十時を少し過ぎている。信二から電話があつてから、一時間以上が過ぎていた。

外はまだ雨が降り続いていた。まさか事故にでも遭ったんじゃないか、とも心配してみたが、調べる方法がない。景子の実家に電話してみようかとも思ったが、信二も帰っていないと言っていたし、今日は自分のマンションに泊まることになっている。従って、由美が電話をすると、却ってまずいことになってしまう。

ただ信二からの電話を待つしかなかったのだ。

由美は何となくテレビを見ていた。

バラエティ番組で面白そうな内容だったが、頭の中には全く入っていなかった。テレビを観るのではなく、見ているだけである。

由美はテレビを見ながら、景子のこと、信二のこと、そして弘一のことを考えていた。

弘一からの電話があつてから、三十分近く経つたとき、また電話の着信音がなった。非通知だ。

由美はボタンを押すと、今度はちゃんと前置きを言った。

「もしもし、田辺ですが……」

今度こそ信二からだと思つたが、電話の向こうはまた沈黙があつた。

「もしもし……誰？ 信二さん？ 弘ちゃん？」

由美は不安げに言つた。

「安田景子つて女、知ってるか」

突然、男の低い声がした。

「はい、知ってますけど……。あなた、誰ですか？」

「安田景子に男がいるだろう。彼氏だよ、彼氏」

相手の男は由美の問いに答えず、一方的に話を続けた。「その男のことで、ちよつと訊きたい事があるんだが」

「ちよつと待つてよ。自分の名前も言わないで失礼じゃないの。誰よあんた」

由美はこの電話がただ事じゃないと分かつたが、相手のペースに乗せられないように気をつけた。

「フツ、元気のいいお嬢さんだ。俺のことはあまり聞かないほうがいいんじゃないか。人の命が懸かつてるんだ。言うことに素直に答えたほうが身のためだ」

男の声はドスが効いていた。

「人の命つて誰のことですか。何のことだかさっぱり分かんないわ」

「安田景子とその男。場合によれば、お前の命だつて保障できねえな。その男の名前、何て言うんだ」

「知らないわ」

「どこに住んでいる」

「知らないわよ」

由美は気丈な女である。酔っ払いや暴走族などにかかわれても、常に毅然と対処できる強さを持っていた。

しかし景子の命が懸かるとなれば、そうはいかなかった。

「景子はどこにいるの？」

「さあ、どこかな。それよりお前が景子の男を知らないはずがない。調べはついているんだ」

「知っていればどうなのよ」

「今すぐその男をそこに連れてくるんだ。お前が住んでいるマンションだよ。いいな、今からすぐだぞ」

男は威圧するように言った。

「ちよつと待ってよ。私は……」

「景子が殺されてもいいのか。人の命は大事にした方がいいんじゃないかねえか」

「何言ってるのよ。それはこっちの台詞でしょ」

「また後で電話する。いいな、すぐに連れて来るんだぞ。分かったな」

男は低く唸るような声でそう言うと、突然電話を切ってしまったのである。

由美はしばらく、静かになった携帯電話を見つめていた。

「何なの、今の……。間違い電話じゃないわよね」

ということは、「景子が誘拐された……」

由美は一人で呟きながら、頭の中を整理しようとしていた。しかし突然の出来事に、頭の中は錯乱状態である。

携帯を閉じた由美は、慌てて服を着替え始めた。パジャマ姿なのだ。

とにかく信二さんに知らせなきゃ……。

由美はジーパンとTシャツだけの、楽な格好でマンションを飛び出すと、最近買ったばかりの軽自動車に乗り込んだ。車で飛ばせば、

信二のアパートまで十分くらいでいける距離であらう。
雨はまだ降り続いていた。

その五

(五)

テーブルの上に置いてある灰皿に、タバコの吸い殻が山のように溜まっていた。

ムシャクシャして来ると、本数が増えてくるのが信二の悪い癖だ。景子がタバコの臭いを嫌がるので、いつもはあまり吸わなかったが、景子がいなくなったことで、精神的に落ち着かないのだ。

景子がアパートを飛び出してから、数時間が経とうとしていた。

信二は知っている限り、彼女が行きそうな所に電話を掛けまくった。近所も公園から路地裏、人の家の庭から、屋根の上（もちろん、そんなところにいるとは思わなかったが）まで探し回った。

しかし、どこにも景子が姿を見せた形跡は見当たらない。

信二は景子が絶対にアパートに帰って来るはずだ、と自分に言い聞かせ、作ったあった料理にも手をつけず、一人寂しくアパートで待つことにしたのである。

どこかにやけ酒でも飲みに行こうと思ってみたが、もし、景子が帰ってきた時、自分がいなかったら、それこそ大変なことになる。

信二は冷蔵庫から、缶ビールを一本取り出してきた。景子が今日のパーティーのために買って来たビールだ。

一口飲んだ信二は、テレビのスイッチを入れ、チャンネルをあちこちと変えてみた。しかし今の信二には、何を見ても面白くない。

「つまらない番組ばかりじゃなか。何か面白いのやってないのかな」と一人、ふてくされていた。

テレビの下を見ると、例のDVDが転がっている。信二はおもむろにそれを拾い上げると、そのままデッキに差し込んだ。そしてリモコンのスタートボタンを押してみる。

画面には、いきなり女の子の裸体がどアップで映し出された。そ

してなまめかしい声が、部屋中に広がった。

信二はそのシーンを見ながら、興奮するどころか、逆に怒りがこみ上げてきた。

「クソーツ、面白くねえ！」

信二は手に持っていたリモコンを放り投げた。その拍子に、テレビの電源が切れてしまった。

部屋の中は、静寂だけが重苦しいくらいに残っていた。

信二は缶ビールを？むと、一気に飲み干した。外からは、雨の音が絶え間なく聞こえていた。

しばらく考え事をしていて、その雨音に混じって、アパートの階段を上がってくる足音がしていることに気がついた。その足音が、ゆっくりと信二の部屋に近づいて来るのが分かる。

「まさか……」

信二が廊下の方に耳を傾けると、部屋の前で足音が止まった。

そして部屋のドアが、二度ノックされたのである。

信二の顔がほころんだ。

「景子……景子か！」

信二は駆け出すと、勢いに任せて思いっきりドアを開けた。

鈍い衝撃音がした。ドアが何かに当たったらしい。信二は心配そうにドアの外を覗いてみた。

「痛えな！ いきなり開けるなよ……」

男が額を押さえて、しゃがみこんでいた。

「何だ、賢介か。どうしたんだよ」

「どうしたんだじゃないだろ。お前がいきなりドアを開けるから……」

「痛ってえ」

ドアに頭をぶつけたのは、信二の会社の同僚である、斉藤賢介だった。会社内でも一番の仲良しで、今ではお互いに親友と認め合うほどの仲である。

賢介は体格ががっしりとしているスポーツマン。いや、武道家とすべきか。空手、柔道、ボクシングもやっていたらしい。どちら

かといえば軟弱なタイプの信二には、理想的な相棒でもある。

「いやあ、ごめんごめん。ちょっと訳ありでさ。ま、そんなところ突っ立ってないで中に入れよ」

「言われなくたって入るさ」

賢介は信二に促され、痛い思いで部屋に入ることになった。

「あれ、一人か。彼女はどうしたんだ？ 今日是一緒にいるんじゃないかったっけ」

「それが分かってて、どうしてここに来たんだよ」

「何だよ、その冷たい言い方。今日はお前の誕生日なんだろ。彼女と一緒にだって言うから、差し入れを持って来てやったんだよ。プレゼントを兼ねて。もちろんすぐ帰るさ」

賢介は、頭をぶつけた拍子に落としてしまったビニール袋を拾い上げた。中には缶ビールとウイスキーが入っている。

「ほい、プレゼント。ビールはまだ開けない方がいいな。部屋中泡だらけになる」

信二はプレゼントに貰ったビールを冷蔵庫に入れると、景子が買ってきたビールを二本出して来て、一本を賢介に渡した。

「さ、これで乾杯だ」

「あれ、彼女は？」

「いないよ……」

「何で？ だってこの料理、彼女が作ったんだろ。どこか出かけてるのか」

賢介はそう訊くと、缶ビールのふたを開け、喉を鳴らしてうまそうに飲んだ。

「それがさ、ちょっとケンカになっちゃって、出て行っただけでここに居たか分からないんだよ」

信二もビールを飲みながら言った。

「自分の家に帰ったんじゃないのか」

「それが家にも帰ってないらしい。友達のところも電話してみたんだけど、行方不明なんだ」

「そりゃ心配だな。ところで、何でケンカしたんだよ。浮気がバレたのか」

賢介はニヤツと横目で見ると、からかうように言った。

「何言ってるんだよ。俺が浮気する男だと思ってるのか」

「あれ、しないのか？」

「当たり前じゃないか。俺がそんなことする度胸がないってこと、お前が一番よく知ってるだろ。これだよ、これ」

信二は例のDVDを、賢介の前に差し出した。そしてタバコを一本取り出すと、百円ライターで火をつけた。

「何だ、こんなことでケンカか。くだらねえな、このくらいで。これがここにあつたから怒っちゃったわけ？」

「その通り。俺も隠しとけばよかったんだよ。忘れてたんだよ」

「でも、お前も悪いよ。今日は二人っきりのパーティーだったんだろ。こんなもんがあつたら彼女だって怒るよ。今どき珍しい純情な娘なんだから。少しは彼女のことも考えなきゃ」

賢介は空になったビールの缶を右手で振りながら、信二におかわりの催促をしていた。

「しかし景子が出て行ってからかなり時間が経つし、そこまで怒るような奴じゃないんだけどな。たぶん由美ちゃんの所には連絡が行くと思うんだけど、後でまた電話してみようと思ってるんだ」

信二の声は、次第に小さくなっていった。

「ま、いいじゃないか。今日は俺たち二人だけでバーステイパーティーやろうぜ。男だけつてのもたまにはいいもんだぜ。なんなら俺が彼女になってやるよ。ネエ、シンちゃん」

賢介は横座りになると、信二の肩をチョンチョンと突いて来た。

「やめろよ、気色悪い！とにかく、しばらくここにいていいから、景子が戻ってきたらすぐ帰るんだぞ」

「分かってるよ。とにかく飲もうぜ。これ、食ってもいいのか？」

と、賢介が、景子を作った手料理に手を伸ばそうとした。

「やめろ！　だめだよ、景子のお手製なんだから。お前はそこのあ
るエビせんでも食ってろ」

信二は賢介の手をぴしゃりと叩くと、語気を強めて言った。信二
もまだ手をつけられずにいたし、景子が帰って来てから二人で一緒
に食べるつもりだったのだ。

エビせんをつまみながら、賢介に今日の出来事を話していた
と、信二はサクサクというエビせんが砕ける音の中に、またアパー
トの階段が上がってくる足音を聞いたのである。その足音は、やは
り信二の部屋に向かっていた。
「ほら、聞こえるか。やっぱり帰って来たんだ。今度は間違いない
ぞ」

信二の目が輝いた。
コンコン、とドアがノックされる音。と同時に、信二は駆け出し
ていた。

「景子か！」
信二はまた、勢いに任せてドアを思いっきり開けたのだった。
また衝撃音がした。

「イターイ！」
再び信二がドアの外を覗くと、今度は由美が額を押さえてしゃが
み込んでいた。

「由美ちゃん……どうしたんだよ」

「どうしたじゃないわよ。信二さんがいきなりドアを開けるから……
…。イターイ！」

再び同じ言葉が繰り返されたのだった……。

「何だつて！　誘拐？」

信二は叫ぶように言った。「だ……誰に……」

「そんなこと分かんないわよ。犯人は自分のこと何も言わないんだ
もん。ただ一方的に脅迫されて……」

「何て脅迫されたんだ」

「それがさ……」

信二の部屋では豪華な料理を横目にして、部屋の隅で三社鼎談が始められていた。

額に冷たいタオルを当てている由美。缶ビールを右手から離さない賢介。そして、顔面蒼白となった信二の、合同ミーティングとなった。

「景子がどこかに連れて行かれたのは間違いないのよ。ただ、信二さんを私の部屋に連れて来いって。景子と信二さんと、それから私の命が懸かってるんだって。ただそれだけなの」

由美は顔を強張らせながら、信二に向かって言った。

「何で俺を由美ちゃんの部屋に呼ぶんだろう。だって俺のこと知らなかったんだろ」

信二は怪訝な顔つきで言った。自分が何者かに脅かされるようなことがあるとは、夢にも思っていなかったのだ。

「知らない振りをしているだけだと思うわ。だって景子を誘拐して、私のことも知ってて、景子の男っていえば信二さんしか考えられないし。きつと何か魂胆があるはずよ」

「でも信二が由美ちゃんのマンションに行ってどうなるんだよ」

賢介が二人の間に割って入った。

「そんなこと分からないわよ。でもまた後で電話するって言ってたわ。そこで信二さんに何か要求でもするのかしら」

「要求だって？俺、金持ってないよ」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。しっかりしてよ、もう」

由美が信二の肩をパチンと叩く。

「警察に電話した方がいいんじゃないか」

と、賢介は言った。

「待って、早まらない方がいいと思う。私のところにまた電話があるから、それからでも遅くはないと思うの。相手の出方を見てからよ」

由美はそう言うと、両腕を組み深く考えていた。「でも何の目的があるんだろう。本当にお金だったら景子の家に電話するはずよね。どうしてお金持っていない信二さんなんだろう」

「もってなくて悪かったね」

信二は憮然として言った。

「今はそんな問題じゃないだろ。たぶん誰かに関係してるんじゃないのかな」

「誰かって？」

「たとえば景子ちゃんの前の彼氏とか、今、景子ちゃんに惚れてる男とか。まさか信二に惚れてる女はいないと思うけど、その女に頼まれたとかさ」

賢介は二人を交互に見ながら言った。

「それはどうかな。景子は信二さんと付き合う前は、長い間恋人なんていなかったわ。それに最近だって、景子に近づく男なんて……」

「じゃあ俺か。そんな女いたかなあ」

「それも考えられないよな」

賢介はあっさりと言った。

「余計なお世話。もつとましなこと考えられないのか」

信二は自分ではあまり考えられないのに、賢介だけを責めていた。もちろん信二の頭の中はパニックになっているのだから、仕方のないことではあるが。

「とにかくこんなところでクドクド言ってたって始まらないよ。早く由美ちゃんのマンションに行こうぜ。警察は犯人からの電話の後だ」

賢介が一番に立ち上がる。

「そうね、とにかく行きましょう。さ、信二さん、頑張るのよ」

由美の一言が、信二の勇気を奮い起こした。

そして三人は、由美の車で、マンションへと急いだのだった……。

その六

(六)

波が岩場に打ち寄せる音が間歇的に聞こえている。大きな波ではない。小さな波が、優しく岩肌を撫でるように打ち寄せていた。他に聞こえるものは何もない。

ここがどこか海岸沿いの家の一室らしいことは分かる。しかしその部屋は、真つ暗闇で何も見えなかった。

部屋のどこかに寝せられている。ベッドだろうか、ソファだろうか。柔らかい感触が全身に伝わっていた。

「ここはどこなんだろう……」

景子の頭と身体には、何となく痛みを伴う痺れが走っていた。今まで眠っていたのだろうか。どこから記憶がなくなっているのか全く分からない。自分が置かれた状況が把握できないのだ。

部屋の窓には分厚いカーテンが引かれ、明かりはどこからも入っていないかった。ただ闇の中に、景子の吐く息と波の音が繰り返し流れているだけだ。

景子は起き上がろうとした。しかし体が言うことをきかない。全身が痺れているせいだろうか。景子は手足を少し動かしてみた。

しかし手足は、景子の命令に従わなかった。手首と足首を、何かロープのようなもので縛られていたのである。

景子は身動きができなかった。

「何で私がこんな目に遭うんだろう……」

どうしても景子には理解できない。

とにかく今までの状況を思い出してみよう。

「そうだ、信ちゃんのアパートを飛び出して、公園の前で誰かに……」

暗い部屋の一点を見据えて、回顧していた。

ワゴン車に押し込まれた景子は、抵抗むなく拉致されてしまった。

急発進した車の中から信二の姿を見つけたとき、景子は信二と目が合ったような気がした。しかし外からでは雨も降っていたし、車のライトを浴びた信二の目に、車内の様子など分かるはずがなかったのだろう。

「私をどうするつもりなの」

景子は身体を縮め、震える声で言った。

「どうもしやしねえよ。余計なことは訊くな」

左にいる目つきの悪い男が、窓の外を見ながら言った。

「どうもしないって……どこに連れて行く気なの」

「さあね、俺は知らねえよ」

「あなたたちは一体何者なの？ 何の目的があるの？ ねえ、教えてよ」

景子の声が次第に大きくなっていった。

両隣にいる男二人は、まったく面識がない人間だ。景子の目が、運転席の男の後頭部を見ていた。

「あなたは誰？ 顔を見せてよ」

景子はそう言つと、運転手の肩に手をかけようとした。

「おっと待ちな。そんなことしちゃ危ねえじゃねえか。事故って死ぬのはごめんだぜ」

両隣にいる二人の男に、景子の身体は引き寄せられた。

「おとなしくしてないと痛い目に遭うよ。そうなってもいいのかい、景子ちゃん」

左の男が優しい口調の中にも、威圧するような声でそう言った。

「どうして私の名前を知ってるの？ なぜ私を……」

景子の顔に戸惑いの色が浮かんた。なぜ自分の名前を知っているのだろうか。

車は繁華街に差ししかろうとしていた。今日は土曜日だというの

に、繁華街を歩く人は少なかった。急に降り出した雨のせいかもしれない。

景子は虚ろな目で外を見ていた。逃げる隙はないのだろうか。車が繁華街のメインストリートの信号で止まった。赤信号である。車の横を数人の若者が歩いていった。景子の両隣にいる男たちは、それぞれに窓の外を眺めていた。

景子は男の虚について車のドアを開けようとした。ドアが半分ほど開いたのだ。

「助けて！ 助けてください！ 誰か助け」

景子は大声で助けを求めた。

横を歩いていった若者たちが振り向いた。そしてその中の一人がワゴン車の方に一歩踏み出したとき、車は急発進した。信号はまだ赤だった。

「バカヤロー！ 何しやがるんだ。てめえ殺されたいのか！」 景子の身体は再び二人の男に押さえつけられていた。

「やめて！ お願いだから助けて下さい！」

景子は発狂寸前だった。大きく身体をゆすりながら、車の中でわめき散らしていた。とにかくこの場から開放されたい、自由にしたい、早く信二のアパートに帰りたい。ただそれだけを願っていた。

「おい、どうする。やっちまうか、あれ」

左の男が運転席の男に訊いた。景子の身体を押さえながらだ。

「そのほうが手っ取り早いんじゃないか」

右の男も同調していた。

運転席の男はしばらく黙っていたが、景子の状態をバックミラーで確かめると、

「やれ」

と、一言だけ言った。

左の男がカバンの中をかき回していた。そして中から何やら怪しげなものを取り出す。

異臭がしていた。車の中に薬品の臭いが漂いだした。

男はその薬品をハンカチに含ませると、いきなり景子の顔に押し当てた。

ツーンとした臭いが鼻腔を貫く。

「やめて！ やめてくださ……」

口と鼻の上に強く押し当てられたハンカチのせいで、それ以上言葉が出せなかった。

景子は懸命にもがいてみたが、手足の先から力が抜けていく。男の服を？ んでいた手も、少しずつずり落ちていった。そして次第に意識が薄らいでいくことが、景子には分かった。

全身の力が抜けた。目を開けることもできなかった。

男たちが何かを話している声が、かすかに聞こえるだけだった……。

「薬が効いたようだぞ」

「眠ったか」

「ああ、もう大丈夫だ。しばらく目を覚ますことはないだろう」

「少し窓を開けるよ。こっちまで眠くなったら大変だ」

「それよりさっきこの女の声聞いた奴ら、何か気がついたんじゃないかな。こっちを見てたぞ」

「車のナンバー、憶えられてないかな」

「大丈夫だよ。そんな暇なかったさ」

「それよりこれからどうするんだよ」

「警察には捕まりたくないからな」

「今から海岸沿いの別荘に運ぶ。お前らはそこまでいいよ。悪かったな、協力してもらって」

「この女、どうするんだ」

「お前らは気にしなくていい。別に殺したりはしないし。この女が目覚ましたら話をしたいだけだ。彼女も分かってくれると思う」

「これだけでも犯罪なんだぞ。誘拐罪。分かっているのか」

「結果的にはそうはならない。いや、ならなくなるんだ」

「どういうことだよ。俺たちも片足突っ込んでるんだぞ。知る権利があるんじゃないか」

「だから……明日になればすべてが終わる。話はそれからだ」

「俺は知らねえぞ。とにかく別荘までだ」

「ああ、心配するな。へんなことにはならないさ」

ワゴン車は海岸沿いの国道を走っていた。繁華街から一時間もかからないところだ。海が街から近いこともあるが、ワゴン車もかなりのスピードを出していたので、割と早く海岸沿いに来たのである。景子の耳に男たちの話し声が聞こえていた。しかし意識が切れ掛かる寸前である。どの男がどの台詞を話しているのか、全く分からなかった。話の内容を整理する力もなくなっていたのだ。

景子の消えかかる意識の中に、一本のキャンデルが浮かんでいた。そのキャンデルを挟んで、信二と景子が見つめ合っている。二人とも笑顔だった。幸せそうな微笑だった。

信二の誕生日を二人で祝っている光景であった。

景子は至福の笑みを浮かべながら、なぜか目から涙がこぼれていた。

幸せな光景が霞んで来たのは、自分の涙のせいなんだ。私はこんなに幸せなのに、どうして泣いているんだろう。そんな不思議な涙を流しながら、景子は深い闇へと落ちて行ったのだった……。

足音が聞こえて来た。階段を上がる足音のようである。

ということは、ここは二階なのだろうか。

廊下を歩く音に変わった。そしてその足音が近くなって来たとき、ピタリと音が止んだ。

景子の身体が一瞬ピクリと動くと、恐怖感が膨らんでくる。身体中の筋肉が、少しずつ硬直していくのが自分でも分かった。

足音が聞こえていた方向に神経を集中させると、突然ドアが開いた。

眩い明かりが景子の目を刺激した。長い時間暗闇の中にいたせいで、廊下の電灯の明かりもまぶしく感じられる。

目を閉じると、その刺激が脳まで走り、微かな鈍痛を覚えた。景子はそこに人の気配を感じた。ドアのところに誰かが立っているのだ。

少しずつ瞼を開けてみた。しだいに光に慣れていく。そして、ドアのノブを？んだまま立っている男の姿を見た。

しかし男の後ろにあるライトのせいで、その姿はシルエットになっていた。男は動こうとしない。ただじつと景子の姿を見下ろしていた。

顔が分からないその男に、景子は小声で問いかけた。

「あなたは誰？　ここはどこなの……」

男は返事をしなかった。ただじつと景子を見ているだけだ。

「私をどうするの。お願いだから返事をして下さい」

「心配することはない。しばらくここにいてくれればいいんだ」

男は小さな声で言った。

「あなたは誰なの。私のこと、知ってるんでしょ」

「君は綺麗だ。とても素直で優しく、僕の恋人にしたいくらいだ」

男の声は、哀しげな口調だった。

「話をはぐらかさないで。そんなことを訊いているんじゃないわ」

「君の恋人が羨ましい。できれば代わりたいたいものだ」

「彼を知ってるの？　信二さんのこと、知ってるの？」

「彼は幸せ者だ。でも一人だけ幸せになったら不公平なんだよ」

「一人だけじゃない。私だって幸せよ」

「そうじゃない。世の中不幸な人がたくさんいる」

「私たちに関係ないじゃない。それになぜ私をこんな目に……」

しばらくの沈黙が続いた。男は中に入ろうとせず、下を向いたまま動かなかった。

「手足は痛くないか」

「痛いわよ。早く解いてくれないかしら」

「それはできない。もう少しの辛抱だ。我慢してくれ」

「もう少して何があるの。それに何の目的があるの」

「もう少しの辛抱だ」

「私、あなたの声、聞いたことあるような気がする。あなたは、もしかしたら……」

景子がそう言うと、男は一瞬ギクリとした表情を見せた。そしてクルリと背を向けると、ドアを閉めて出て行ってしまった。

景子の耳に、男が階段を降りて行く音が聞こえていた。そして部屋にはまた暗闇が戻った。

「やっぱり私が知ってる人だ。あの驚きよう、普通じゃない。でも、どうして……」

景子はそう考えながら、自分の記憶を辿っていった。

確かに声には聞き覚えがあった。そして体つき……。あの男に間違いない。しかしなぜあの男が自分を誘拐したのか、見当もつかない。

景子はベッドから、縛られている両足を下ろすことができた。そしてその反動で上半身を起こした。頭から血が下がって行くのが分かる。一瞬立ち眩みのような感覚が頭の中で渦巻いた。

手足のロープが解けないか、自分で身を振り、両腕を互いに動かしてロープを解こうとした。かなりきつめに縛ってあるようだが、景子の若くて柔らかい四肢は何とかそのロープから逃れることが出来るような気がしていた。

懸命にもかく両腕。手足に食い込むロープ。今にも手首がちぎれそうな痛みがしていたが、次第にロープが緩んで来た。もう少しだと勢いを込めて右手を引き抜いた。

痺れるような衝撃と同時に、両腕がロープから解放されたのだ。景子の両手は痺れていた。その痺れた両手に勢いよく血が駆け巡っていて、痛いほどだった。

大きくため息をつく、両手の感覚が甦るのを静かに待ったので

ある。

その七

(七)

「どうしよう……。やっぱり警察に知らせたほうがいいのかしら」
「いや、もう少し待ってみよう」

「それにしても遅いわ。何かあったのかしら」

由美のワンルームマンションの部屋に、重苦しい空気が漂っていた。信二のアパートから大急ぎで由美のマンションにたどり着いた三人は、犯人からの電話を待っていた。

しかし一向に犯人からの電話はなく、ただ緊張感とも悲壮感ともいえる雰囲気の中で、まんじりともせず電話が鳴るのを待っていたのである。

「ビールでもないかな」

賢介が呟くように言った。

「何言ってるんだよ、こんな時に」

「こんなときだから言ってるんだよ。素面でいるより少しアルコールが入っている方が、勇気も度胸も湧いて来るんだよ、俺」

「ビールならあるわよ。いつも冷蔵庫の中にストックしてあるの。」

私も付き合うわ」

由美はそう言うのと、冷えた缶ビールを三本出してきた。

「信二さんも少し飲んだ方がいいんじゃないの」

「俺はいいよ。今日は景子と二人で飲みたかったんだ」

信二は下を向いたまま、両手を頭の上に乗せて考え込んでいた。由美と賢介は一気にビールを呷った。二人ともザルと言われるほどアルコールは強い方なのだ。

時折三人は電話機を凝視していた。

「最初に犯人から電話があったのは何時ごろ？」

賢介が由美に訊いた。

「そうね、十時過ぎくらいだったかしら。もう二時間以上は過ぎてるわね」

「しかし逆算してみると、誘拐されたのは信二のアパートを出てすぐだろ」

「たぶんそうだと思う」

信二は相変わらず頭をかきむしっている。

「ということは、八時過ぎ。もう四時間以上は経っていることになる。知らない者の行きずりの犯行かな」

「そうじゃないと思うわ。私や信二さんのこと、景子に訊いたとは考えられないの。彼女、そんなおしゃべりじゃないもの」

「じゃ、知ってる者の犯行か。待ち伏せしてたのかな」

「そうとしか考えられないいよ」

信二が頭から手を離して言った。

「一体誰が……」

「それが分かれば苦労はしないわよ」

「電話の声は聞いた事なかったのかい」

「電話じゃ分からないわ。私も突然でびっくりするし、相手の声を分析するなんて……」

由美は立ち上がってカーテンを開き、窓を開けて下を覗いてみた。もしかしたら電話ではなく、ここに来るのではないか、と思ったからだ。

「雨……まだ降ってるわ」

由美は考えていることとは違うことを言った。

「他に電話とかなかった？」

と、賢介が訊く。

「他には……。弘ちゃんから電話があっただけよ」

「弘ちゃん？」

「信二さん知らないかな、片瀬弘一さん。私の大学の先輩なの。景子も何度か会ったことがあるわ」

「由美ちゃんの彼氏？」

賢介が意地悪っぽくそう訊いた。信二は現在由美に恋人がいないことを知っていた。

「そんなんじゃないけど……。頼りにできる兄貴、ってとこかな。」

一応先輩なんだけど、仲のいい友達なの」

「景子も知ってるの？」

「少しは知っているはずよ。私ほど仲良くしてたわけじゃないけどね。さっきも景子のこと相談してみたの」

「何か知ってた？」

「彼は何も知るはずがないわ。彼と景子は個人的な付き合いがあるわけでもないし。でも彼は体力もあるしケンカも強そうだし、犯人と揉める時なんか役に立つんじゃないかな」

と、由美は誇らしげに言った。「一見冷たそうなタイプなんだけど、私が困っている時はいつも助けてくれるの」

「由美ちゃん、好きなんだ、その彼のこと」

「うーん、そんなんじゃないけど……。私も分かんない」

由美は何か考え込むように宙を見つめていた。

自分自身の気持ちも分からなかったが、由美から見た弘一の気持ちもはつきりしなかった。確かに由美には優しくするし、何でもよく協力してくれた。しかし二人の間では、恋愛じみた話など今までしたことがなかった。そして由美が弘一に対して口癖のように言っていた言葉が、「信二さんのことが好きなの」だった。まさか弘一がその言葉を信じているとは思っていなかったのである。

突然現実の世界に引き戻されるように、電話の着信音が鳴り出した。一瞬部屋全体の空気が凍りつき、三人の身体がピクリと動いて目が合った。

由美は緊張のあまり、すぐには携帯電話を取り上げられない。賢介に促されて、ようやくその手に取った。

開いてみると、画面に表示された、片瀬弘一の名前がそこにあった。

安堵のため息と共に、由美は通話ボタンを押す。

「何してんだよ。俺だよ」

「もう、弘ちゃん、びっくりさせないでよ」

「驚くことないだろ。どうしたんだよ」

弘一は笑うように言った。

「弘ちゃんの話しをしてたとこなの。噂をすれば影つてとこね」

「誰か来てるのかい」

「今、信二さんが来てるの。ほら、さっき景子のこと話したでしょ、行方不明だって。あの後景子を誘拐したって脅迫電話があったの」

由美が信二に視線を送った。信二は電話の相手が犯人じゃないと分かると、ため息と共にまた両手を頭の上に乗せた。

「それで、犯人は何だって？」

「景子のことは何も言わないんだけど、信二さんのことばかり訊いて、信二さんを私の部屋に連れて来いって。ただそれだけだった」

「それで信二さんが来てるのか。それから？」

「また後で電話するって言ってたけど、まだないの。三人でずっと待ってるんだけど」

「三人で？ 他に誰がいるのか？」

弘一は意外そうな言い方で訊いた。

「そうよ、ボディガード。タイミングよく信二さんのアパートに友達が来てたの。とても遅しくて頼りがいがあるから一緒に来てもらった。助かるわ」

由美は賢介の肩をポンと叩きながらそう言った。

「何だよ、てつきり二人でいるのかと……」

弘一は呟くように言った。

「何よそれ、どういうこと？ 弘ちゃん、信二さんが来てること知ってたの？」

「いや、そういうわけじゃ……。あのさ、実は俺も景子ちゃんのこと気になってて、一緒に捜そうかな、なんて思ってた」

その時、電話の向こうで、ガシャンという大きな物音がした。そ

して弘一の話も途切れた。

「もしもし、どうしたの。弘ちゃん……」

由美は不穏な雰囲気を感じしながら、何度も電話の相手に呼びかけた。

「もしもし、弘ちゃん？　もしもし……」

手の痺れは少しは良くなっていたが、両手のロープから解放されても、しばらくは腕に力が入らなかった。何とか足のロープも解いておかなければ、いざというときに逃げられない。

両手を振って少し感覚が戻ってきたところで、足のロープも自分で解いた。かなりきつめに縛ってあったようで、ロープの痕を手でさすってみると、でこぼこに痕が残っていた。

三十分ほど経っただろうか。暗い部屋の中に一人でいる景子は、ベッドの上に座り、考え事をしていた。これからの作戦である。

このままここにいても、どうしようもない。何とかこの家の中を調べたかったが、物音を立てて見つければ、何をされるか分かったものではない。

景子はおもむろに立ち上がり、ドアに近づいた。そして音がしないようにドアのノブをしっかりと？み、静かにドアを少しだけ開けてみた。廊下の眩い明かりが部屋の中に差し込んだ。目の痛みには耐え、隙に力を入れる。そして細く目を開けて部屋の中を見回した。

さつき男が入って来たときにはよく分からなかった部屋の様子が、今度ははっきりと確認することができた。

部屋の広さは六畳くらいだろうか。ドアとは逆の方にある壁に窓がある。もちろんカーテンは引かれていた。その下にベッド。横には小さなドレッサーが置かれ、部屋の真ん中に丸型のガラスのテーブルがあった。

部屋の中はきちんと整理されている。景子のハンドバッグはテーブルの上に置いてあった。

景子は改めて自分の姿をドレッサーの鏡で確認した。正面から、横から、そして後姿を振り返りながら自分の姿を見た。乱暴されたような形跡はなかった。服もちゃんと着ている。裸にでもされているなら大変なことだ。

景子は自分の身体が犯されていないと分かると、ひとまず安堵感で胸をなでおろした。

「とにかく、ここでじっとしてても始まらない。どこか逃げる場所……」

景子はまずカーテンを開けてみた。窓を少し開けて下を覗いてみたが、やはりここは二階で、窓の下には足をかける場所もない。もちろん飛び降りる勇気などあるはずがない。骨折だけではすまないだろう。

窓とカーテンを閉めてドアまで歩くと、顔を少し廊下の方に出してみた。

二階の一番奥の部屋だった。景子がいる部屋から廊下の突き当たりにある階段までの間に、別に二つの部屋があった。両方の部屋のドアは開け放たれ、人がいる気配はなかった。

景子は足音を忍ばせて歩き、その二つの部屋を覗いてみた。しかし何も置いてなく、ただ空間が広がっていた。

ここがどこなのか、そしてあの男が誰なのか、少しでも探ってみたかったが、明らかにするような物は何も無かった。

景子は階段の降り口まで来ると、下を窺ってみた。階下は廊下になっでいて、階段の前に和室らしい障子の引き戸があった。その障子がほんの少し開いている。明かりは灯っていたが、人がいるかは分からない。

しばらくその場に立ち竦み、じっと階下の様子を窺っていた。すると、その障子に人影が映ったのである。まさかこっちに来るのは、と景子は慌てて部屋に戻った。

しかし誰も上がってくる気配はない。しばらくして、景子はまた、階段の降り口の所まで来た。そして再び下の様子を窺った。

景子の額から冷や汗が流れ始めていた。相変わらず障子は少し開いたままだ。

景子は一か八かの賭けに出ようと思った。階段を降りてみることにしたのである。足音をしのばせ、恐る恐るゆっくりと階段を降りていく。途中まで来たところで、身体を前傾姿勢にして、頭を低く下げて和室の中を覗こうと試みた。

やはり誰かいるようである。何か酒でも飲んでいるのか、時折力ランという氷がグラスに当たる音が聞こえていた。

景子は思い切って下まで降りてみた。しかし右側は壁で行き止まりになっているし、左はどこかの部屋のドアがあるだけだ。外に出るには、この和室を通らなければいけない構造になっているようだった。

緊迫した空気が景子の頬を撫でた。その時、和室の中から男の声が漏れて来た。

男の声は大きくなかった。優しく語りかけるような口調だ。しかし今の状況に置かれている景子にとっては、口の中から心臓が飛び出しそうなほど大きく聞こえたのである。

口の中に詰まった心臓のおかげかどうか分からないが、驚いて出そうになった声も止まり、和室の中の男に気づかれずに済んだ。

景子は激しく動悸する胸を押さえ、男の声を聞いていた。

他に人がいるのではなく、電話で話をしているようだった。怖い男の声ではない。普通の男の、優しい語り口調だった。

景子は耳を凝らして聴く。そして……。

男が呼びかけている名前は、ユミ。　ユミ？

それに、この声、聞いたことある。確か……。

片瀬さんだ！

景子はこの男が同じ大学の、しかも由美と仲良しの片瀬弘一だということに気づいたのである。

その時、景子の身体は自分の意思とは裏腹に、咄嗟に動き出した。

障子の引き戸を思いつきり開け放つと、和室の中に飛び込んだ。しかし、たまたまそこに置いてあった食事の後の食器の山に足を取られてしまった。

ガシャンという大きな音と共に、弘一が振り向いた。

景子は転倒し、その場に転がった。弘一が自分を見ている。景子も弘一の顔を凝視していた。

弘一の手には、携帯電話が握られている。景子は俊敏に起き上がり、弘一の手から携帯を奪い取った。

弘一は突然のことで動きが鈍くなっていた。そして景子は電話機に向かって大声で叫んだのである。

「由美！ 私よ、景子！ 助けて！」

景子はその後どうなるか、考える余裕がなかった。ただ、この一本の電話に救いを求めるしか方法がなかったのだ。

「ここがどこだか分からないけど、海の近くの家にいるわ。別荘みたいなのところ。片瀬さんが私を――」

弘一がにじり寄って来ると、いきなり携帯を取り上げた。そしてすぐスイッチを切ってしまった。

弘一は景子を見下ろしていた。景子も弘一を睨みつけている。しばらく二人の口から言葉は出なかった。

景子の中の恐怖心はもう消えていた。犯人が弘一だと分かったせいか、由美に助けを求めたからかは分からない。ただ開き直っただけかもしれない。

「あなた、片瀬さんよね。由美の――」

「何も言うな」

「でも私が知っている片瀬さんじゃない。私が知っている片瀬さんは、こんなことする人じゃない。もっと男らしくて優しくて、人を傷つける人じゃなかったわ」

景子は透き通るような真つすぐな声で言った。倒れていた身体を起こし、壁に背をつけて座る。

「どうしてこんなことするの？」

「一人でロープ解いたのか」

「そうよ。あんなもん簡単よ。 片瀬さん、一人？ 他に誰かい
るの？」

「見ての通り、俺一人さ」

「確か、最初三人でいなかったっけ」

「二人はもう帰した。あいつらには迷惑かけたよ。巻き込むつもり
はなかったんだけど、どうしても一人じゃね」

「でも、共犯よね」

景子の言葉に、弘一は一瞬言葉を詰まらせた。

「どうして君を誘拐したのか、あいつらは知らないよ。あいつらを
責めないでくれ」

「なんでこんなことするの？」

弘一はその場に座った。そしてテーブルの上に置いてある水割り
の入ったグラスを掴むと、一気に飲み干した。

景子は弘一が何も言わないでその場に座っているのを、横から見
ていた。そしてテーブルの上に視線を移した。

そこには水割りのグラス、携帯電話、そしてその横に、数枚の写
真が置いてあった。

弘一はその写真に視線を落としている。ただ無表情にその写真を
見つめていた。

「それ、誰の写真なの。何か……」

景子は背筋を伸ばし、写真を覗こうとした。

「見たいんだったら、見せてやるよ」

弘一は三枚の写真を手にとると、景子の前に投げ出した。そして
自分で水割りを作り始めた。

「この写真、由美じゃない。大学生の時の写真よね」

「君も写ってるだろう」

その中の一枚は集合写真だった。大学時代の遊び仲間で、十人く
らいは写っている。一番右端に由美と景子が並んでいる。そして一
番左端に弘一が写っていた。

そして一枚は由美のシングル写真。もう一枚は弘一と由美が笑顔で肩を組んでいる写真だった。その写真では二人とも屈託なく笑っている。何の不安も心配もない、明るい笑顔だった。

しかし今の弘一の顔には、明るい表情もなければ、精気さえ感じられなかった。

「どうしてこの写真を……」

景子は弘一の表情を窺いながら訊いた。

「三年前の写真だよ。みんなでキャンプに行ったじゃないか。憶えてるか」

「ああ、あの時の。楽しかったわ、あの頃は」

その写真は、大学の遊び仲間と海でキャンプをした時の写真だった。由美の誘いに集まってきた仲間たちである。

「ここの近くのキャンプ村さ」

「ここの近く？　じゃあ、ここは……」

「そう、俺んちの別荘さ。といっても俺のじゃなくて、親父の別荘だけだね」

弘一は鼻先で笑うように言った。

「どうしてこの写真を……。片瀬さん、もしかして由美のこと……」

「そうさ、初めて会った時から一目惚れだったんだ。このキャンプで本気で火が付いた。でも……言えなかったんだ。ずっと」

「どうして？　アタックしてみればよかったじゃない。由美だって、もしかしたら」

「知ってるんだよ。あいつには好きな男がいる」

「誰よ。私は知らないわ」

景子には思い当たる節はない。由美は心配事や相談事があれば、一番に景子に相談してくれていたのだ。

「片瀬さんの思い違いじゃないの。好きな人がいたら私に相談してくるはずよ」

「君には相談できないはずだ」

「どうして？」

「由美が惚れているのは、君の彼だ。信二さん、っていうのかな」

「まさか！」

「本当だ。いつも言ってるよ」

「ハハハ、ばつかみたい。そんなの嘘よ。由美が信二さんを好きだなんて」

景子は呆れるように、笑いながら言った。

「あいつは俺には嘘は言わないよ」

「でも、それとこれとは関係ないでしょ。どうして私がこんな目に遭わなきゃならないの」

「すべて俺の計画はメチャクチャだ。君のロープは解けるし、電話には飛びつくし。由美の部屋には男が二人だ。もう終わりだ」

弘一は両手で頭を抱え、テーブルにゴツンゴツンと打ち当てた。

「俺は、由美が……君が……」

弘一の声は言葉にならなかった。そして額が割れるのではないかと思うほど、テーブルに叩き付けていた。

景子はどうすることもできず、ただその様子を見ていることしかできなかった……。

その八

(八)

いつの間にか雨は上がっていた。いつ止んだのか誰も気が付かなかった。

国道を走る車はワイパーを作動させずに済んだが、スピードが出ているタイヤからは、まだ水しぶきが上がっていた。今の時間、走る車の数は少ないが、それでも夜中にドライブを楽しむ若者や、荷物を運ぶ運送会社のトラックと時折すれ違っていた。

「もつとスピード出ないのか」

「そんな無茶言わないでよ」

由美は両手でしっかりとハンドルを握り、視線を正面から離さないようにして言った。

「ここで事故したら元も子もないからな。無理に飛ばさなくていいから、慌てないで急いでくれ」

と、賢介が無茶苦茶なことを言った。

「その場所分かるのかい」

「大丈夫よ。何度か行ったことあるもん。といっても、もう一年以上前のことになるんだけどね」

由美は自分が飲酒運転だということを、全く意識していなかった。というより、これくらいの量であれば大丈夫だという自信を持っていた。

「でも本当にその別荘にいるのかな」

助手席に座っている信二が、心配そうに訊いた。

「大丈夫、間違いないわ。海の近くって言ってたし、弘ちゃんは何かあるといつもあの別荘に一人でいるの。よく別荘からだって電話があつたわ」

由美は自信に満ちた顔で言った。

別荘というより、住宅街に立つ一軒家のような造りだ。ただ住宅と違うのは、建物の中にほとんど備品が置いてないところだろうか。一般的な電化製品とちよつとした調度品が置いてるだけで、広い空間を自由奔放に使える贅沢極まりない別荘だった。

裏手に廻れば砂浜の海岸が広がり、夏になれば家族連れや若者たちの恰好の行楽地と様変わりする。都会に近い別天地ともいえる場所だった。

その砂浜でキャンプを張り、みんなでバーベキューをしていた時のことを由美は思い出していた。

肉や野菜をたくさん買い込み、クーラーに缶ビールをたつぷりと冷やし、暗くなつてからの炭焼きバーベキューだ。

網の上で焼き上がる肉からは肉汁がこぼれ、辺りに香ばしい匂いを漂わせる。乾杯の後のギンギンに冷えたビールは最高に旨かった。網焼きの肉を啄みながら、仲間たちと語り合う。みんなの顔がほころんでいる。楽園の中の微笑みだった。

しかしそんな中、隅の方で、一人でビールを飲んでいる男がいることに、由美は気が付いた。由美は新しい缶ビールを二本、クーラーから出して男に近づいた。

「どうしたの、暗い顔して。何か悩みでもあるの？」

「そんなことないよ。俺はいつもこうなんだ。心配してくれてありがとう。十分楽しんでるよ」

「そのビール無くなるころでしょ。新しいビール持つて来たわ。一緒に飲みましょ、弘ちゃん」

二人は乾杯をして缶ビールに口をつけた。そしてまた仲間とともに談笑を始めた。

「そうだ、忘れ物しちゃったな。ちよつと行つて来るから待つてくれないか。すぐ戻るから」

「行つて来るつて、どこまで行くの？」

「すぐ近くにうちの別荘があるんだよ」

「へえ、凄いんだ。弘ちゃんの家ってお金持ちなんだね。いいなあ」

「親父が道楽で持つてるだけだよ。俺には関係ないさ」

「私も一緒に行つてあげようか。一人じゃ怖いでしょ、本当は」

由美が悪戯つぽくそう言うと、弘一は微笑んで肯いた。

満月の明かりで白く輝いた砂浜の上を歩いている二人の後ろ姿は、いかにも仲のいい恋人同士に見えたことだろう。

別荘の外で由美は待つていた。しばらくして弘一が出て来る。手に持つてるのはカメラだった。

「せっかく仲間が集まつているのに、誰もカメラ持つてきてないだろ。記念写真、撮つておかないと」

弘一はカメラを目線まで上げて、笑顔でそう言った。

「さすが弘ちゃん、気が利くう」

由美も相好をくずし、弘一の肩をポンと叩いた。

よく考えてみれば、本当に誰もカメラを持つて来ていなかった。普通キャンプともなれば、誰かが持つて来てもよさそうなのだが、今まで誰も気が付かなかったのだ。

「まず一枚撮つてやるよ」

「私を？」

「これ新品のカメラなんだ。前から欲しくてね、最近やっと買ったんだよ」

「まだ使つてないの？」

「今日が初めて。このカメラの中に収めるのは、由美が第一号つてことになるな」

「私でいいのかな。カメラ壊れないかしら。あまりに美しすぎる被写体だから」

と、由美はおどけて見せた。

「そうだな、このカメラ、ぶつたまげるかもしれないな。カメラのフラッシュより、由美の方が明るいかもな」

「どういう意味よ、それ」

ちよっぴりのふくれっ面にあどけない笑顔。弘一を叩こうと軽く

手を上げたところで、明るいフラッシュの閃光が由美の体を包み込んだ。

「第一号、撮ったぞ」

「もう、ブスに写ってたって知らないからね」

「大丈夫だよ。きつとかわいく写ってるさ」

弘一はカメラを肩に下げると、由美を促して歩き出した。

林の中を通り抜け、砂浜に出た辺りで弘一が立ち止った。一歩後ろを歩いていた由美は、危うく弘一の背中にぶつかるところだった。

「どうしたの、急に立ち止まって」

「由美……あのさ……」

弘一は声を詰まらせて下を向いた。

「どうしたの？」

由美は弘一の前に回ると、心配そうにのぞき込んだ。

「いや、いいよ。何でもない」

「何よそれ。何か言いたいことがあるんでしょ。ちゃんと行ってよ」

「お前さ、誰か好きな男はいるのか」

「私に？ どうして？」

「いるの？ いないの？」

「さあ、どうかな。いるような、いないような。 どうしてそんなこと訊くの？」

「誰なんだよ、その男」

「誰って……。 ナイシヨ」

人差し指を唇にあててそう言うと、「弘ちゃんは誰か好きな人いるの？」

「俺か。 いるよ。 スッゲー可愛いんだよ。 あれは天使だな」

「へえー、誰？ 私が知ってる人？」

「由美が一番よく知ってるよ」

「誰だろう。 佐代子かな、夢香かな。 もしかしたら景子じゃない」

「さあ、誰かな……」

弘一は視線をそらし、黒い海を見ていた。

「景子はだめよ。あの子は純情で真面目なんだから」

「由美は純情で真面目じゃないのか？」

「私？ 私が一番純情じゃないの。まだ男の人の手も握ったことないんだから。小学校のフォークダンスは別として」

「ホントかよ。信じる奴は誰もいないと思うぞ」

「本当よ。ほら、見てよ。この可愛いモミジのような手。全然擦れてないでしょ」

由美は両手を広げて弘一の前に突き出した。

「じゃ、これも俺が第一号だな」

弘一はそう言つと、由美の手をやさしく握る。

由美の体に一瞬熱い血が駆け巡った。もちろん男の手を握るのが初めてではないことは分かっているが、いつもおとなしい弘一の突然の行動に驚いたのだ。

由美の口から言葉が出なかった。ただびっくりして、そのまま弘一の顔を凝視していた。弘一も何も言わない。時間が止まったのではないか、と由美は思っていた。

普通のラブストーリーであれば、二人はこの後目を閉じて、自然と唇が重なり合う。そしてそのまま二人は倒れこみ……となるのであるが、そうは問屋が卸さない。

弘一はさつと手を引くと、くるりと後ろを向いてしまった。

「さ、行くぞ。みんな待ってるよ。それとも飲みすぎて出来上がってるかな」

弘一はそう言つと、ゆっくりと歩きだした。しかし由美は両手を握りしめたまま、動くことができなかった。まるでロウ人形の状態だ。

「どうしたんだよ。おいて行くぞ」

「うん……。ねえ、弘ちゃん。私の好きな人のこと訊いて、どうするつもりだったの」

「別にどうもしないよ。ちょっと訊いてみただけさ」

「それだけ？」

「由美に話したいことがあったけど、もういいや」

「何よ、そんな中途半端な言い方はやめて。言いたいことがあるんだっいたら、はっきり言ってよ」

由美は真剣な顔で語気を強めて言った。

弘一はゆつくりと背中を向けた。そしてしばらくの間を歩いて、「その、お前が惚れた男とうまくいけばいいな。俺も何とか力になってやるよ」

と、優しい口調で言った。

「弘ちゃん、私は……」

由美は静かに話しかけようとした。しかしその声は小さく、たまたま打ち寄せた波の音にかき消され、弘一の耳には聞こえていなかった。

「頑張れよ。さ、行くぞ」

弘一はそう言うのと、一人で先に歩き始めた。今度は後ろを振り返ることもせず、そのまま歩き続けた。

少し間隔をおいて歩いていた由美は、友人たちのグループの近くまで来ると、その輪の中でカメラのフラッシュが瞬いているのが目に映った。

「もう……」

由美は砂浜に落ちている石ころを蹴飛ばしながら、「つまんない

……」

そう呟いて、グループの輪の中に戻って行ったのだった……。

その九

(九)

繁華街から少し離れた所、といつても住宅街やオフィス街ではなく、その中間点、境目となるような場所がある。会社の事務所もあれば、小さな商店や喫茶店、店舗兼住宅の薬局や園芸品店。もちろん一般住宅も建ち並んでいる。

そんな中に一軒の小さなスナックが入り込んでいた。カウンターに五、六人程度と四人掛けのボックスが二つ。長年この店をやっているベテランママと、三十歳くらいのホステス。そして最近アルバイトで入って来た二十二、三歳の女の子の三人で、この店の客の接待をしていた。カウンターもボックスも、満席になることは滅多になく、三人もいれば十分な広さだ。

繁華街の中心部であれば、あと一人か二人はホステスが欲しいところだが、ここは街と町との境界線上であるため、客足は中心部より遠のいてしまうのは仕方ないことかもしれない。したがって、料金も安めであるし、キープの値段も中心部より少し割安に設定してある。

街の騒々しい雰囲気嫌いな酒飲みたちが数人、この店の常連となっていた。

今はカウンターに仕事帰りのサラリーマン風の男が一人、ボックスには初老の男二人連れが一組入っているだけだった。

カウンターにホステス一人、ボックスでママとアルバイトの女の子が接客していた。

入り口のドアに吊るされている鈴が鳴って、二人連れの若い男が入って来た。

「あら、いらつしゃい。今日は遅いのね」

と、ママ。

「いらつしやいませ。どつちに座る？」

アルバイトの女の子がすぐに立ち上がると、二人連れに近づいて行った。

「いたのか、悠子。今日は休みじゃなかったのか」

「何言ってるの。昨日がお休みだったじゃないの。あつ、そうか、今週はまだ来てなかったのよね、敏夫さん」

「今日はいないと思ってたよ」

「あら、じゃあ私の休みを狙って来たのね。そんなに私に会いたくなかったの？」

悠子は意地悪く笑って見せた。アルバイトのため、週に三日だけこの店で働いているのである。

「今日はカウンターでいいよ。ちょっとマジな話があるんでね」

敏夫はそう言つと、連れの男、竜二を促してカウンターの一番すみに腰を掛けた。

悠子は慌ててカウンターの中に入ると、温かいおしぼりを出して来て二人に渡した。

「いらつしやい。何にする？」

悠子は改めて挨拶をして、飲み物のオーダーを訊いた。

「俺のボトル、まだ入ってるか？ 無かったら新しいのキープしてくれ」

「まだ半分くらい残ってたんじゃないかな。ちよつと待ってて」

悠子は後ろを向いて、キープ棚の中から敏夫のボトルを出してきた。まだ半分以上は残っていた。

「今日は水割りにしてくれ」

「あら、いつものロックじゃないの？」

「今日は酔っぱらうわけにはいかないんだ。のどを潤す程度でいい」
敏夫はそう言つと、「こいつも俺と一緒にしてくれ」

と、竜二を指さして言つた。

「何だよ、俺もかよ」

「ちょっと話があるんだ。酔う前に話をしとかないと……」

敏夫はそこまで言うと、悠子が作った水割りを一気に飲み干した。
「そんなにがぶ飲みしたら、ロックで飲むのと変わらないじゃない。

何かあったの？」

悠子は心配そうに訊いた。

「実は昨日、警察にパクられたんだよ。くそう、あのポリ公め」

「パクられた、って……。敏夫さん、何やったの？ まさか強盗とか、婦女暴行とか……」

「そんなことしたら今ここにいるわけないだろ。とつくに豚箱さ」

「それもそうね。でも敏夫さんなら婦女暴行とかやりそうじゃない。ははっ」

と、悠子が悪態をつきながら、「私も一杯いただくわね」

と言つて、自分の水割りを作り始めた。

「ははっ、じゃないよ、全く。駐車違反だよ」

「駐車違反？ どこに止めてたの？」

「車じゃないんだよね、それが。原チャリ。五十CCのバイクで駐車違反なんだつてよ」

「原チャリで？」

「正確には駐輪違反だな。レッカー移動されてたんだ。道路に白墨で（出頭せよ）って書いてあったよ」

敏夫はまたグラスを掴むと、今度は半分ほど飲んだ。竜二が横で笑っている。

「それで、警察には行つて来たの？」

「行つて来たさ、昨日の夜中に。昼はポリ公が大勢いるだろうから、人が少ない夜中に行つたんだ。そしたら俺の相手をしたのが可愛いネーチャン。婦警だったんだ」

「あら、よかったじゃない。その婦警さん、口説いて来たんでしょ」

「何が口説けるもんか、あんなお堅いネーチャン。俺がちよつと冗談言ったら、スゲー怖い顔して睨みつけやがって、散々叱られてきたよ」

「その怒った女の顔が、また可愛いんだよな」

竜二が横で笑いながら言った。

「何とか勘弁してくれってお願いしたら、後ろから人相の悪いポリ公が近づいて来て、俺のこと睨んでたよ。あれはきつとポリ公の制服を着たヤクザだぜ」

「さすがの敏夫さんも、警察にはかなわないみたいね」

「当たり前じゃないか。罰金とレッカー代でしめて一万二千元。ヤケ酒代も含めると約三万円の損だな。もったいねえなあ」

「もったいないのはヤケ酒の方でしょ。でもまあ、そのおかげで私もおいしいお酒をいただいてるけどね」

悠子はグラスに残っている水割りを一気にあけると、二杯目の水割りを作り始めた。

また入口の鈴が鳴った。三人連れの客が入って来る。そして女の子たちの挨拶を受けながら、空いているボックス席に座った。

「悠子ちゃん、お客さんよ」

と、ママの声が聞こえて来た。どうやら悠子のなじみの客のようである。

悠子は温かいおしぼりを手に持って、ボックス席に近づいた。

「いらつしゃい。久しぶりじゃないですか」

と挨拶しながら、そのボックスに座り込んだ。

その様子をカウンターの隅で見ていた敏夫は、フツと小さな溜息をついて、空になったグラスに自分で水割りを作り始めた。

「あら、ごめんなさい、敏ちゃん」

と、ママが気を配った。

「俺たちも話があるから、こっちは構わなくていいよ」

敏夫はママに向かって言った。しばらくは誰も俺たちの前には来ないだろう、と周りを確認すると、竜二の方に向かって姿勢を直した。

カウンターの先客とは少し距離がある。ボックスの方にも、スペースは狭いが、敏夫たちとの間にアンティークな置物が置いてあり、

どちらも座つていればお互いの姿は消えてしまう。

敏夫は何から話したもののか、と思いながら水割りを飲んでみると、竜二の方から小声で話しかけてきた。

「あいつ本当に大丈夫だろうな。何かとんでもないことしかすんじゃないかな」

「俺が話しかかったのは、そのことなんだ」

「大雑把にしか話を聞いていなかったけど、お前は事情を知ってるんだろ」

二人は周りの目を気にしながら、ヒソヒソと話し続けた。

「知らない割には、お前の演技力も大したもんだよ。あの女、本当にビビってたもんな」

「そりゃビビるよ。知らない三人組の男たちに拉致されるんだ。普通ならションベンちびっちゃうぜ」

「実はそのことでお前に話がある。あのな」

敏夫と竜二。この二人、景子を拉致した時の、片瀬弘一に加担した二人組である。

最初に景子の腕をつかんで話しかけたのが竜二。あのスポーツマンタイプのがつしりとした体格である。そして後から出てきて景子に脅しをかけていた、あの目つきの悪い男が敏夫だったのだ。弘一とこの二人の出会い、まだ最近のことだった。

弘一は金持ち社長の一人息子だが、父親の会社には入らず、勝手気ままに転職を繰り返していた。しかしどこに行っても長続きせず、昼の仕事や夜の仕事、植木屋に行つたかと思えばショットバーのバーテンをやってみたり。

夜はいつも町をふらつき、いろんな店へと出入りしていた。

そして弘一が出入りしていたミニクラブで、よく顔を合わせる客同士ということで、約半年前に知り合ったのがこの二人だった。特に弘一と敏夫は、それから二人で飲み歩く機会が多かった。どちらも物静かで、やたらと騒ぐようなタイプではない。どことなく一匹狼タイプなのだが、二人でいると、なぜか二匹オオカミという言葉

さえびつたりくるような雰囲気があつた。ただこの二人は、お互い何を考えているのか分からない、怖い雰囲気さえ持っていた。

竜二は敏夫の学生の頃からの友人である。お人好しで、何でも頼まれるといやとは言えない性格だ。今回の拉致事件にしても、大変なことにはならないから、ということで、この肉体に景子の拉致を委ねられていたのである。

そしてわけが分からないまま、今この店で敏夫から話を聞こうと思っていたところだった。

「あいつ、死ぬぜ」

「誰が？」

「弘一だよ。片瀬弘一」

敏夫の意外な言葉に、竜二は声を失った。

「あいつ、最初っから死ぬ気だったんじゃないかな」

「ちよつと待てよ。それじゃ話が違うじゃないか。誰も傷つけることはないって、最後は丸く治まるって……。そうじゃなかったのか」

「すべて丸く治まるさ。すべてね」

「あの女は？ あの景子っていう女。あの子はどうなるんだよ」

竜二はそんな事情があるとは知らず、人助けのつもりで加担していたのだ。それがこんなことになるうとは、詳しく聞かずに加わったことを後悔していた。

「残念だが、あの女も道連れだ。でもそれでいいんだよ。すべて丸く治まるんだから」

「どういうことだか説明してくれないか。俺は殺人に手を貸すつもりはないぞ」

「心配するな。俺たちは何もやっちゃいないんだから。すべて弘一が一人でやったことになっている。あいつ、悩んでたんだ」

「何を。仕事か、金か、女か」

「全部。あいつは人生のすべてに行き詰ってたんだ。仕事も定職につけず、親からも見放されてる。女にもろくに話もできないし、友達だって少ないんじゃないかな」

「だったらお前と変わらないじゃないか」

「俺はいいんだよ。俺はいつだって能天気だし、楽天家だからな。でもあいつは違う。一人で悩んでどんどん落ち込んでいく。誰も助ける奴はいない。ただ、惚れている女がいるんだが、あいつは指をくわえて見ているだけなんだ」

「誰だよ」

「さっき俺が電話してた由美って女さ」

「だからその由美と信二が弘一の別荘に行って、四人で話し合い、そして円満に解決。ということじゃなかったのか」

竜二は興奮気味にそう言くと、グラスをドンとカウンターに叩き付け、敏夫に詰め寄った。店の中にいた客やホステスたちが、一斉に振り向いた。

「あ、ごめんごめん。何でもないんだ。気にしないでくれ」

敏夫は周りにそう言くと、「でかい声出すんじゃないよ。お前も殺人犯になりたいのか」

そう言って、また水割りを飲み始めた。

「お前、そんな奴だったのか」

「由美は信二に惚れてるんだ。信二だって分かりやしないよ。景子の友達だから言えないだけかもしれない。弘一は所詮片思いなんだよ。その弘一が最後にできることは、自分が惚れた女が幸せになることなんだ」

「だから？」

竜二の額に汗が浮かんでいた。敏夫の言うことが、まだ理解できないのだ。そして竜二の頭の中には、魔の手から逃れようとする景子の歪んだ顔が見え隠れしていた。

「どっちにしても弘一は自殺しようとしているんだ。そこで景子は道連れ。後に残った信二と由美が、もしかしたらうまくまとまるかもしれない」

「そんなにうまくいくもんか。なぜ二人が死んでしまったのか、分からないだろ」

「だから俺がいるんだよ。弘一と景子は、実はできてたんだ、と信二と由美に伝える。そうすれば二人とも騙されたと思い込むだろう。後は二人にお任せ。どうなったって俺の知ったことじゃない」

敏夫は冷淡な口調で言った。時には薄ら笑いさえ浮かべながら。

「知ったことじゃないって、お前、弘一を助けたいと思わなかったのか。友達じゃなかったのかよ」

「あいつは死んだ方がいいんだよ。それがあいつのためだ。生きていたってしょうがないんだよ」

「俺、今から行ってくる」

竜二は立ち上がり、セカンドバッグを取り上げると、そのまま歩き出そうとした。敏夫は慌てて竜二の腕をつかむ。

「行つて来るって、どこに行くんだよ」

「別荘に決まってるじゃないか。あいつらを助けに行くんだよ」

「やめるよ、もう遅いかもしれん。弘一は拳銃を持ってるんだ」

「拳銃？ 何であいつがそんな物持ってるんだ」

「あいつは大企業の息子さ。親父のコネを使えば、何だって手に入るんだよ」

敏夫は数日前に、弘一から自殺をほめかす話を聞いているとき、バッグの中から拳銃を取り出して見せていたのである。もちろん入手先は明らかにしなかったが、大企業ともなれば、暴力団と何らかの関係ができていやすい。自分が本当に欲しいものは手に入らないが、こういうものであれば何だって手に入るもんさ、と自慢していたのだ。

「まずその拳銃で景子をズドン。そして別荘に火をつける。最後に景子の横で自分の頭をズドン。それですべておしまいさ」

「まだ終わってたわけじゃないだろう。生きているかもしれない」

とにかく俺、行ってみる。お前との付き合いもこれで終わりだ。あはよ」

竜二の憤怒ぶりは尋常ではなかった。カウンターに置いてあった自分のグラスを敏夫の前で叩き割ると、あっという間に店を飛び出

して行つた。そして店の前に停まっている客待ちのタクシーに乗り込み、運転手に行き先を告げた。

タクシーが発進するのとはほぼ同時に、店の中から敏夫が飛び出して来た。しかしタクシーを止めることはできず、車は走り去ってしまった。

「どうしたの、敏夫さん。何かあったの？」

店の中から悠子が飛び出して来て言った。

「くそう、あの野郎。あいつはあんな正義の味方じゃなかったはずだ。良い子ぶりやがって」

「ケンカしたの？」

「何でもないよ。今日の飲み代はつけといてくれ。ママによろしくな」

敏夫はそう言うと、近くの駐車場まで走った。自分の車で来ていたのだ。もちろん飲酒運転など関係ない。いつものことだ。

竜二に先に着かれては、面倒なことになる。まだ自分の話を最後までしていなかった。もし全員が助かることになると、自分の立場が不利になることは明白だった。早く行って竜二に追いつかなければならない。

敏夫は駐車場から車を出すと、猛スピードで竜二を追いかけたのだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6925w/>

懺悔～ZANGE～

2011年10月7日03時23分発行